

# 歌の転生

田川邦子

くらきよりくらき道にぞ入りぬべきはるかにてらせ山のはの月

「播磨のひじりのおもとに、結縁のためにきこえし」の詞書を持つ、和泉式部のこの一首は、『法華経化城喻品』の、「從冥入冥、永不聞仏名」（冥きより冥きに入り、永く仏名を聞かず）に依るといふ。和泉式部にとり、これが記念すべき一首であるのは、勅選和歌集に選ばれる榮譽を得た、最初の一首であるからだ。この歌を載せる勅選集『拾遺和歌集』の成立が、はたしていつ頃であったのか、長徳年中（九九五年—九九八年）成立説、寛弘二年から寛弘四年頃（一〇〇四年—一〇〇六年）の成立説など、いろいろあつて、明確に断定はできないらしい。それに式部の生没年もはつきりしないから、実際に彼女の何歳の時の歌か、それも正確にはいえないわけだ。ただ性空上人の没年は寛弘四年であるから、それ以前の作であることは間違いない。式部の生年ははつきりしないが、成徳年中に『拾遺和歌集』が成立したとすれば、この一首は、和泉式部のかなり若い頃、結婚以前の十代の頃にまで遡らなければならなくなる。結婚後次々にめぐり合う二人の愛人、為尊親王、敦

道親王との出逢いや、死別の年が、それぞれはつきりしている関係から、それよりさらに数年以前もさかのぼる長徳年中は、彼女が最初の夫橘道貞と結ばれる頃か、それ以前の十代の少女時代になるからである。

寛弘二年から四年頃に、『拾遺和歌集』成立を想定すれば、和泉式部がこの歌を詠んだ年代も、寛弘三年位まではさげることが可能になる。勅選集成立年代の推定は、手に余る問題で、私などが出る幕ではないけれど、寺田透氏などもいわれるように、和泉式部に即して云えば、「くらきよりくらき」の歌は、やはり寛弘二年か三年頃の詠であるにちがいないとの思いをつよくするのは、この一首に宿る影の深さを、結婚後の式部の体験に、重ね合わせて考えざるを得ないところがあるからだ。最初の夫橘道貞は、有能な官吏で財力もあり、女がその一生を現実即して思い描くとき、頼れる男として、殆ど不足はないはずの人物だった。事実和泉式部は、他の男と愛の遍歴を重ねながらも、最初の夫道貞には、常に未練の感情を残しており、それを度々歌にもする。

かはりのんちりばかりだにしのばしなあれたる床の枕みるとも

と、そもそも別の折からして、共寝の枕を前に、感慨にふける彼女、「いさら及する事ありて、をこのいへをさるとて、つねにするまくらにかきつくる」の詞書のある歌である。

さりたるをとこの、とほきくにへゆくを、「いかがきく」といふ人に

わかれてもおなじ都にありしかばいとこのたびの心ちやはせしと、離別した夫道貞が、陸奥守として旅立つのを知ったときも、心の動揺を抑えきれない。いさかいと離別の原因をつくったのは、彼女であるにもかかわらず、自分の行為を割り切れず、気持の整理もつきかねている、迷いの深さ。

世の中にこひといふ色はなけれどもふかく身にしむ物にぞありけり

まどろまば憂き世ゆめともみるべきにいづらはさらに寝られざりけり

なども、別れた夫を心に置いての詠であろうと思われる。これほど未練を残さなければならぬ夫道貞との間に、何故為尊親王、敦道親王二人の皇子を割りこませてしまったのか。王朝の男女関係の自由さを念頭におけば、納得はいくかもしれず、彼女も最初の恋人為尊親王との出会いが、これほど決定的に夫婦の間を引き裂こうとは、予想していなかったかもしれない。

二人の皇子との恋が、その後の道綱や雅道との交渉のように、ほんのかりそめ事で終らなかつたのは、この恋に、身も心も捨てさせてしまふほど、不思議な魅力があつたからであろう。彼女は、皇子という高貴な対象に関りを持ち始めるとき、現実的な夫道貞には感じられない、不思議な情感を味わたつたのだと思う。そしてあらゆる

情緒、感情、姿態、言葉を総動員して、この恋に没入していった。おおかたの定説通り、『和泉式部日記』を、和泉式部本人の手に依るものと考えれば、彼女は相当すぐれた「恋の演出家」だつたと思う。もちろん情感溢れる、理想的な恋を演出するのは、貴族階級の女性には、必須の教養の一つではあつたけれど、それをみごとに演じつくすには、まず何よりも、文才が必要であつた。当意即妙な歌の応酬は、修練をつめば、誰もが水準には達するだろうが、それさえ、持続するのは難しい。まして機智と技巧と、情趣を解する豊かな感受性が要求されれば、それは日常の分野というよりも、個々の才能の問題になつてくる。それに女がいくら才のありたけを披瀝しても、男の側にそれを汲みつくす用意がなければ、どうにもならない。才能ある女たちが男に求めたのは、深い受容性を持つ、洗練された教養と、真に高貴な人柄であつた。紫式部が半生かかつて光源氏の物語を書き上げたのも、才能ある女が夢見ながら、現実には得難い理想のキャラクターを、虚構の世界に再現しようとする情熱からであつたと思う。

「あはれになに事もきこしめしうとまぬ御ありさまなれば、心のほども御らんせられんとてこそ思ひもたて——」（『和泉式部日記』）と、和泉式部は書いている。日記の中で、愛人帥宮の人柄について触れた一節であるが、深い受容性を持つ、おおらかな人柄と、洗練された教養、皇子という高貴な身分。この帥宮との交渉は、愛の感情を、歌の贈答のくり返しの中に増幅させ、恋と芸術が一体化する、微妙な世界の中にくり広げられる。『和泉式部日記』を、ただの痴情の文学だと、貶す人もあるけれど、交わされる歌の数々は、かなり高い水準を保つものばかりで、感情の屈折が、歌の技巧とよ

く調和して、王朝の贈答歌の中でも、優れたものの一つになっている。紫式部が虚構の中に追究したものを、和泉式部は、恋を通して自分のものとし、真に王朝的な理想を生きようとしたのである。

しかし彼女のように、中流出身の貴族にとつては、常にもう一つの現実があった。それは父の大江雅致、夫の橘道貞の属する、意外に堅実な、中流貴族の生活と社会である。恋と芸術が一体化した、この玉期的ローマンスも、現実を着実に生きる人々から見れば、狂気の沙汰にちがいない。夫の怒り、父の怒りは、皆当然といえれば当然であり、これらの人々の存在、そしてこの人々が共有していたであろう、生活感覚と、彼女が無関係であるわけではない。

「くらきよりくらき」の歌は、こういうものを熟知している彼女が、のめり込んだ愛欲の世界の深底から発した、苦悶の声として、理解される。しかもそれは、もともと王朝的な、美やあこがれを内に秘めた、愛欲の中から、発せられた声でもあり、迷いと執着の底で、自己を見つめる、内省の響きさえ、そなわっている。しかし同時に「はるかにてらせ山のはの月」という、このなだらかか、とおおらかな言い廻しの中に、清明な山頂の月光、つまり書写の性空上人への讃仰の念はあっても、仏道に帰依する志の深さはあまり感じられないのも事実である。七日余りの予定で石山に籠るつもりが、「仏の御まへにはあらで、ふるさとのみ恋しく」て、早々に山をおり、

山を出でて暗きみちにぞたどり来し今一たびのあふことによりと、愛人帥宮に送る式部。晩年の詠とも思われる「えこそなほうき世とおもへどそむかれぬおのがこころのうしろめたさに」を見て、仏教は決して和泉式部の心をとらえきるものではなかった。そ

れどころか、同じく晩年の詠であらう、

ねし床に魂なき骸をとめたらば無げのあはれと人もみよかし

と、自分の「魂なき骸」を、ありありと凝視する、まなざしの鋭さ。こういう想像力は、特に当時貴族社会に流行していた、浄土信仰の感情とは、やや質を異にしていたといわなければならぬ。

皇子とのロマンスで世を騒がせ、藤原道長から、「うかれ女」の異名を頂戴した式部ではあったけれど、三十過ぎてから選んだ二番目の夫藤原保昌も、有能な受領層の貴族で、共に丹後国にくだりしている。この階層が持っている活動性、視野の広さ、自己の立場をよくわきまえ、着実に現実を生きる感覚など、一見和泉式部文学とは無縁に見えるようだが、その実彼女の感覚の底流には、こういうものが、色濃く流れていて、それが自分を凝視する眼の確かさに連らなっているのではなからうか。さればこそ

とどめおきて誰をあはれと思ひけん子はまさるらん子はまさりけり

などの秀歌が可能になったのだと思う。

「室泊遊君吟二鄭曲一、結縁上人事」というのは、『発心集』にある説話であるが、ここで室泊（むろのとまり）の遊女が、結縁のために、僧に捧げる歌が、例の「くらきよりくらき」の歌になっている。もちろん和泉式部には関係のない話だ。僧の乗る舟をさして漕ぎ寄せ、鼓を打ち、この歌を二三遍くり返し、「かがる罪深き身になれるも、さるべき報に待るべし。此の世は夢にやみなむとす。必ずすくひ給ひなん。心ばかりに縁を結び奉る也」と、言い残して去って行く。ただそれだけの話だが、すでに和泉式部のこの歌

が、仏教説話に流れ込む、その最初の形跡をとどめる点で、注目してよい話だ。遊女たちは、歌をくり返して去って行くだけで、至極あっさりしている。結縁とはいっても、もともとは縁無き聖職者に対し、儀礼上送った、鄭重な挨拶にすぎない。思うにこの歌は、実際に中世もかなり早い時期から、この辺の遊女たちが、聖職者に贈る挨拶の技芸として、選ばれていたものではないだろうか。「思はず、哀に覚えて、涙を落したり」というのも、僧の側の感傷であって、彼女たちは相手に相応しい一曲を、多くのレパートリーの中から選び、披露しただけの事だろう。

こう考えると、「山のはの月」を仰ぎながらも、月と自分の世界の、隔りの大きさを、はじめから自覚している、和泉式部の心情と、この歌を僧侶への挨拶代りに歌う遊女たちのやり方とは、似たようなもので、女が罪を懺悔して、仏道に帰依する折の、回心の歌という、汲み取り方とは、あまり関係はなさそうだ。

『三国伝記』に出て来る、和泉式部の説話が、あのようにもものしいものになったのは、『法華経』信仰者の好みによるらしい。巻第八にある「性空上人上東門女院相看事」は、あきらかに和泉式部の歌を依り所に、拡大加工した話であるが、少しばかり、作為の目立ちすぎるのが欠点だ。和泉式部だけでは足りなくて、上東門院まで登場させるのは、上流貴族への関心のなみなみでない事を見せている。にもかかわらず、女人を「鬼」と貶しておき、あとから『法華経』を差し出すなど、性空のやり方は、手がこみすぎている。その時の歌

二つ無く三つなき法と説く故に五つのさはりあらしと思ふも、何かちぐはぐなのは、柳田国男がいうように、一代の高僧性空

が読むはずのないものを、ここに出したからではなく、この説話の中の性空が、女人禁制とはいえ、居留守をつかって、女たちを避けたりする、奇妙な権威主義が、この歌の持つ、稚拙、素朴な庶民性と合致しないからである。

とにかくもこうして、この「くらきよりくらき」の歌は、女の五つの障りの嘆きを、象徴するものになった。「女人の身程口惜事ハナシトテ、泣々立帰」るとき、書写の御坊の柱に、和泉式部が書きつけるのがこの歌で、ここで一つの場面化が完了するわけだ。もともと『法華経化城喻品』の文句を下に敷くとされるこの歌が、『法華経』の功德を宣伝する説話の中に生かされるのも、自然の成り行きではあるが、それはあの室の泊の遊女のように、この歌を愛唱した女の側から出たものではなく、見くだして拒絶し、その後少しばかり許容の色を見せて、勿体をつけるという筋書きを見ても分るように、男性の、しかも当時においては、すでに保守思想になっていた、『法華経』信仰の側から出たものだ。『提婆達多品』の、竜女の「变成男子」と「成仏」の話は、女もまた成仏可能であることを説くので、知られているが、これは同時に、成仏し難い女という前提があったからこそである。「女身は垢穢にして、これ法器に非ず」で、成仏は「变成男子」に依り可能とすれば、成仏し難い女の問題は、依然として未解決のまま残ってしまう。『法華経』の提出したこの問題が、中世の文学や宗教に与えた影響は、実に大きかったのだ。

沙弥玄棟の論理では、おそらく、成仏し難い成仏を遂げた女人和泉式部は、さしずめ『法華経』の竜女に匹敵することになるだろう。竜女は沙竭羅竜王の娘で貴族であり、「智慧利根」「弁才無

「で、宝珠を世尊に献じて男子に変成し成仏した。これに対し和泉式部は、和歌を献じて仏縁に連らなつたわけだ。彼女の和歌は、「三千大千世界」の価値に相当するという、竜女の宝珠にも匹敵する価値を持たされている。これは和泉式部のためには光榮であるが、彼女が『法華経』信仰者の、保守的世界のためには光榮である限り、十二単をまとい、上東門院のお供をして歩かなくてはならないのは、『法華経』信仰者の貴族趣味や權威主義と、無関係ではないと思う。

天台教学から念仏へ、『法華経』から『浄土三部経』へ、中世のこの新しい思想界の動きの中で、念仏の世界に姿を現わしたとき、和泉式部は官女から群衆の中に入る、ただの「優なる女人」に変わる。『誓願寺縁起』は『三国伝記』の説話を、巧みに利用しながら、その限界を証明して、『法華経』信仰の世界から、和泉式部を引き出し、念仏の側に獲得してしまつた。中世の新旧思想の抗争の激しさは、このようなところまで及ぶのだが、結果は当然念仏の側の勝利である。

書写に登つた和泉式部は、「くらきよりくらき」の歌を献じ、性空の心を動かして対面し、「けらく不退の宝国に往生すべき正法を、我に示し結へ」と懇願する。ところが性空は、それには答へられない。「我も多年西方の行業を兼修すといへども、本意とする所は一実の観解なれば、弥陀教の利物はまだみつからず、分明ならず」といふ。つまり念仏往生は、専門外だといふのである。どうやら和泉式部は、行く先を間違えたりしたい。それでも『誓願寺縁起』の性空は、『三国伝記』の性空にくらべれば、どこか念仏の聖のような面影もあり、大菩薩の本地は極楽の弥陀尊故、八幡山に行つて折れ

と助言する。この和泉式部の廻り道は、『法華経』信仰から念仏へという、中世の思想界の消長を、そのまま表わしていて面白い。と同時に、念仏宗が女性の信者獲得に、どれほど熱心であつたかを物語つてもいる。

思えば「はるかにてらせ山のはの月」は、『法華経』信仰、つまり天台教学の世界でこそ、意味を持つ結縁の歌であつた。彼女が直接誓願寺に行けば、このような歌ははじめから必要ではなかつたはずである。念仏の聖は、山の上には居ないから、こういう象徴的な言い廻しは、かえつて不自然になつてしまふわけだ。

『法然上人行状絵詞』で、法然は、救いを求める遊女に対し、「たたふかく本願をたのみ、あへて卑下する事なかれ」と教える。念仏宗が、今まで信仰とは縁のなかつた、庶民の私たちの人気を集めたのは、教義の易しさもあるだろうが、上人・聖といわれる人々が、常に庶民の中に入り、彼らの声に耳を傾けながら、布教活動を行つたからである。

『誓願寺縁起』が、異香薫じ、衆音響くなかに、瑞雲たなびき、和泉式部が、阿弥陀如来や、諸菩薩聖衆と共に、雲中に影現するという構図を描いたのは、女人成仏の実例を、宗教的恍惚のなかに、再現してみせる必要があつたからである。念仏信仰の教団で、女性の信者の力を無視できなかったことの、あらわれともいえる。

苦悶の中に詠じ、書写の性空上人に、それこそ儀礼として贈つた一首であつたかもしれないが、和泉式部が、この歌の力により、三百年後に、西方極楽浄土に往生できたのだとすれば、宗教の中に生きる、文学の文脈の深さを、改めて思わぬわけにはいかない。